



藤井達吉《蜻蛉図》1912年頃(寄託作品)

2023年5月2日[火]—6月25日[日]

碧南市藤井達吉現代美術館 リニューアル記念展 碧い海の宝箱—達吉からはばたく未来—

美術品の収集活動は館を形成する上で最も重要な柱のひとつです。当館では、日本近代美術工芸史において前衛的な活動を展開した藤井達吉の作品や彼の芸術観を軸として、時代や地域性を考慮したコレクション収集に努めてきました。本展では、新装した展示室等施設や設備を公開するとともに、藤井の作品や資料をはじめ、購入や多くの篤志家の方々からご寄贈いただいた美術作品など、これまでに収蔵してきた所蔵品の中から厳選した名品112件を改めてご紹介します。

2023年7月7日[金]—8月27日[日]

生誕160年 清澤満之の世界展

明治時代の宗教思想家である清澤満之(1863-1903)の生誕160年、没後120年を記念した展覧会。名古屋生まれの満之は、東本願寺の僧侶となった後、東京大学哲学科を卒業。京都府尋常中学校長、のち真宗大学初代学監となりました。この頃、門下らと東京の浩々洞で求道の共同生活をし、雑誌『精神界』を発行して近代的仏教信仰の確立をめざす「精神主義」を提唱しました。本展では、碧南にゆかりがある満之の生涯を、著作や写真、資料等で辿りながら、彼の思想の形成過程を追います。

2023年9月5日[火]—10月9日[月・祝]

美術と風土 アーティストが触れた伊那谷展

信州の伊那谷は、古来より文化の中心であった京都との関係も深く、万葉集をはじめ中世にかけて和歌に詠まれた歌枕の地です。近世には大浜・棚尾村で製造された塩が矢作川水運と中馬により飯田・伊那まで送られており、碧南市とも関わりがありました。本展は、長野県出身及び京阪神・東海地方在住の現代作家20名が伊那谷を訪れ、この地が持つ特有の風土や生活、歴史や文化に実際に触れて得たインスピレーションをもとに制作した作品を一堂に展示する、新しい形の現代美術展です。



清澤満之 西方寺藏



林蘭子《伊那谷一》2022年 作家蔵 撮影・城戸保

2023年10月28日[土]—12月17日[日]

生誕130年 没後60年を越えて 須田国太郎の芸術 —三つのまなざし—

洋画家の須田国太郎(1891-1961)は、「東西の絵画の綜合」という壮大なテーマを掲げ、日本の精神文化に根差した我が国独自の油彩画を追求し、近代絵画史に偉大な足跡を遺しました。28歳でヨーロッパ各地を訪れ、帰国後は独立美術協会会員として意欲作を発表しました。本展では、初期から晩年に至る代表作を中心に、須田自身が滞欧中に撮影した写真や、能狂言に対する造詣の深さを示すデッサンのほか、自ら蒐集したグリコのおもちゃなどを展示し、須田の新たな魅力を検証します。



須田国太郎《モベハト》1922年 三之瀬御本陣芸術文化館蔵

2023年10月28日[土]—12月17日[日]

顕神の夢—幻視の表現者— 村山槐多、関根正二から現代まで

表現者たちは、自己を超えた言い難い「何か」への憧れや思慕から、その「何か」をとらえるべく身を焦がす思いで制作します。それは、宗教の根幹をなす信仰心の発露ともいえます。ときに土俗的な印象を与える作品は、根強く残る心情の証しです。本展は、約140点の絵画・彫刻作品を通して、今までモダニズムの尺度により零れ落ち、十分に評価されなかった作品に光をあてる一方、すでに評価が定まった作品を新たな尺度で測りなおし、それらがもつ豊かな力を再発見する試みです。



関根正二《少年》1917年 個人蔵



2023年度 展覧会カレンダー

- 碧い海の宝箱
- 顕神の夢
- 清澤満之の世界展
- コレクション展
- 美術と風土
- 文化財・民俗資料展
- 須田国太郎の芸術
- 共催展等

休館日